

□□□□□□

みんなのスペース

◆あて先・問い合わせ 〒028-1392 (住所不要) 山田町役場総務課情報係(内線417) へどうぞ。

やまだ文芸広場

- ・オニヤンマ赤トンボ
- ・どこへ行ったか見当らず
- ・海の幸懲りずに盗むあわび泥
- ・彼岸入り瑞穂の国は黄金色

佐藤 兼男(荒川・87)

津波より千日過ぎも傷跡は癒せぬまゝに生きているだけ

沢 まさ子(山田・?)

照れば降れ降れば照れとの叫びかな

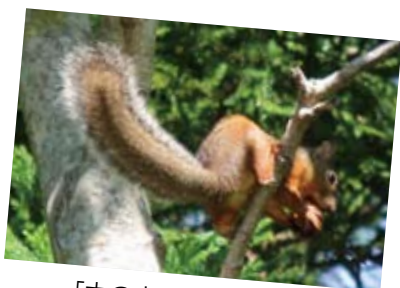
おのが目の力で見ると思うなよ
月の光で月を見るなり

内館 洋一(飯岡・71)

秋の海
今年の夏は、海水浴が、にぎわい
良かったと思います。
暮しやすくなる秋の海を
キレイニシタイカラ:

佐藤 啓子(船越・36)

投稿写真



「木の実を抱えたリス」
山の内弁当(船越・?)



「山田湾を撮りました」
関口ヒロシ(長崎・?)

イラストコーナー



まけこ※エノモト(大浦・13)



スーパー白米(大沢・?)



雨藤(飯岡・18)

飼い犬を探しています



7月29日・午後9時ごろから、飼い犬の姿が見えなくなりました。行方不明となった場所は、豊間根・嶋田地区です。保護している方や心当たりのある方は、下記にご連絡をお願いします。

▷特徴など

- ・名前…「テン」
- ※「テンちゃん」と呼び掛けると反応して首をかしげるような動作をします。
- ・犬種…シーズーとチワワのミックス、オス、9歳
- ・大きさ…体長約50㌢、しっぽの長さ約20㌢
- ・首輪の色…赤
- ・その他…背中に他の犬に噛まれて腫れた跡(触るとわかります)

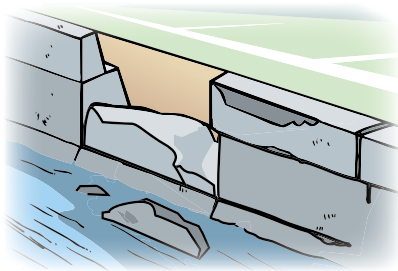
吉田(☎090-4880-3937)

町長室から

祭りの太鼓の音が、本番が近づくとつれ不安げな音から自信に満ち溢れた音色に日々変わっていく。子どもたちの掛け声も同じである。虫の音もお囃子に負けないように日々力強くなっていく▼大杉神社のお神輿は、4年ぶりに練り歩いた町の復興を、どう感じておられたのか。来年のお祭りにはもっと自信を持ってお迎えしたいものだ。そして祭りはあつという間に一抹の寂寥感を残し、秋風とともに通り過ぎてゆく。そして町内のここかしこに小さい秋が顔を出す。私はサトウハチローの「小さい秋見つけた」が大好きだ。この歌を聴くと小学生の頃のかくれんぼを思い出す▼これから山田は1年で一番過ぎやすい季節を迎える。海の幸、山の幸に恵まれた山田に生まれ良かった、と思う季節の到来だ。皆さんが一日も早くご自宅で山田の幸を頼張る日のために頑張りたい。

山田町長 佐藤 信逸

堤防が転ぶ②



《前号の続き》

いよいよ工事が始まるというので、工事の運営を成す事務所の建立が小林さん方の南方の海側であった。年配の監督と女の職員さんの2人の事務所だったが、女の方は山田の白野さんだった。工事の主体たる事務所も成り、工事の起工は事務所の前より北方の方と進行、工事は今の様に重機一つで有るでなし、全てが手作業であった。俺は、いつも事務所隣の養殖の作業を行っているので、お茶

の時にはよく白野さんより声が掛かり、事務所のお茶で監督さんより工事についてよく話を聞いていた。監督は高橋さんと記憶しており、時により人夫の方の都合の悪い場合、応援の要請によって幾度となく応援をしてきた。自分とすれば全く経験のない作業であった。

よっていつでも事務所へ赴き少し自分の時間を使って、高橋さんのお茶で工事の話。土木について全く何の知識も無い自分に、工事現場を説明してくれた。高橋さんについて感心するばかりであった。

職務とは申せ気象の観測だった、1日3度、朝・昼・夕と一定の時間に事務所の脇が海、プールで水位を計り風向、気温そして天候を一定の時間に観測記録しておられた。大浦の人の出来ない大変貴重な記録である。

山崎 卓三(大浦・?)

《次号へ続く》

晩夏(蝉の一生)

残暑お見舞申し上げます。

7月28日、ようやく梅雨明けの発表がテレビの報道で流れた。いよいよ夏本番となり、夜の明けやらぬ内から鳴くセミの声が目が覚める。

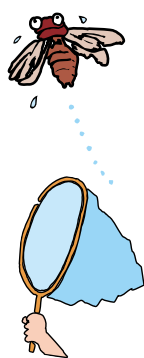
中でも、鳴き始める時期も一

番早く、声を限りに自分を「アビール」し、短い生涯の中で子孫を残さなければならぬ。持って生まれた一生とはいえ、あまりにも短命な、生物は他にいるでしょうか。

セミは卵からふ化して地下にもぐり、約7年もの長い間、成虫になるべく生活をする。やつと地上に出て脱皮し、子孫を残すために一生懸命生きる時期は、1週間から10日間くらいと言われているようである。この世に生をなす者の宿命とは言え、あまりにも儚ない生命だろう。

このような運命でも、生涯を全うしようと生きるものを歓迎し環境を整えてやらなければならぬ。これから先も夏の風物詩と自然とがセミがいつぱい鳴く音にいやされ、つかの間の涼しさを感じる無形の財産を覚えるような気がします。

私たち人間は、考える動物として、こうしたセミたちに負けないように、生涯を過ごすために努力しなければなりません。テレビなどのニュースで報道されるような事件、事故のない、世の中であってほしいものです。眠い目をこすりながらラジオ



をつける、福田こうへいさんの「南部蝉しぐれ」の歌が…。ラッキー。

西館 隆(船越・81)

戦前・戦後を思う

山田町戦没者追悼式が、8月23日、午後1時半から、中央公民館大ホールでしめやかに行われ、尊い命をみ国のために散った方々に、参列者から献花が捧げられました。

戦後、祖国の復興、発展も見ることなく、異国の地で眠り続けている私の兄もその一人です。戦前を日めぐり暦のようにたぐっています。

駅前広場で出征兵の壮行式が行われ、肩から「武運長久」を掛け日章旗を手に、りりしく「勝利してくるぞ」と元氣な挨拶。そしてホームでの見送りで、車窓から身を乗り出して旗を振り、故郷をあとに汽車が遠のいていくのを憶えています。

母の話では、兄は昭和17年に大槌、安渡の若人たちと満州牡丹江に出征。それから、陰膳に「喉が乾くべえから」と水を添えて私も手向けたことを覚えてます。

近所の親御さんたちと、息子と夫の無事凱旋を願い、神々に参拝に歩いたものです。

母親は心のよりどころかなあ、と私は回想しています。

戦地からの兄の手紙に、広場での相撲大会、軍馬の手綱を持った写真が添えられていたのを見て、「外地でも、まあ、まあ」と両親が安心していました。ところが昭和19年、兄の戦死公報。台湾・高雄で撃沈の不報に、肉親は悲しい日々を過ごしました。内輪の話で、満州からフィリピンに渡る途中だったかなあと、推測したりしましたが、詳しい情報は分かりませんでした。

終戦になり、外地からの復員兵の声を聞くごとに、母親は「おふくろ、今帰ってきた」との声を待ち続けたものです。

平和を願っております。合掌。

菊地 サカエ(織笠・79)

